

貸渡衣風入のうき間毎と神理書画の小集  
順講渡何でも如でも一時小破打除の色具程澤山迄一  
打寄の土地の名えも蠟売町迄千小真帆の入船  
汝道まで頼りよめん

竹柴真水

直安 徳兵衛料理園業所披露

尾上梅壽が江家狂言天竺徳兵衛吳国吹し今も目  
菊五郎が観客方の具負受也よ天徳と云傳り  
其徳兵衛と事替り是も同家よ年久しく水門あぬ  
勝幸口又も湯敷の水船多。樂長とを働らく男荒めて  
切と程も大豆も満水をかろせも習ひふれ一後  
相引の糸よ筆すー肺病よ火炎よあらぬ音ひ息  
巨たでも始終木琴下り借金者負がわろく久並て  
官もあらざれを去む明項戴かー麻衣の古堂へ  
はで斤半業あり料理下下と申し所が音羽屋の具所  
仕込の小料理修ひ額巾を服ひ百日で老満よ見得も  
あらざれを只四洲漆の酒他力と仕入とかして小皿盛  
極女興行と專一は衣装道具も揃ぬから夫も  
つせ之期有合者の好みは月目今うあわう調進いし  
始終も立派か大炊兼は金襴の大詰小至らむ迎の  
痛気の一か生洲は榎の吹水修ひは鮮魚と檜差上井  
ぬを徳兵衛料理の初日より後入を頼りよめん

竹柴真水記

蛇の目鮫開店告條

劇場の作者が口上めりしてせしかの初日を江坂中へ新屋  
堅附て四洲漆の蛇の目せしと同日あて鈴屋其屋の異師並